

小国の矜持

畠山 襄 *Noboru Hatakeyama*

(一財) 国際貿易投資研究所 理事長

2003 年のある日、筆者はホワイトハウスを訪ねた。そこに勤務する旧知の友人に会うためである。帰りがけに玄関まで送ってくれた。途中、若干、中の騒音が漏れてくるところを通り過ぎた時に彼が言った。「今日はシンガポールのゴーチョクトン首相が見えていてね。先程までブッシュ大統領と米国シンガポール FTA の署名式だったのだが、今、両首脳出席の下、記念のレセプションが行なわれているのだ」。そして、彼は次のように続けた。「実は米国とチリの FTA もあってね。実際の交渉はそっちが先に終わったのだが、署名はチリの方が延び延びになっている。何故だか分る？」彼は一息つくと、また続けた。「この 3 月の米、英などによる対イラク攻撃開始の際、国連の安全保障理事会にかけようとしたが、反対の空気が強く、止むを得ず、米英などが国連の承認なしに対イラク攻撃をしたよね。非常任理事国のチリもその時の反対国の一つだったのだ。それで米国としては懲らしめのためにチリとの FTA の署名をわざと延ばしているんだよ」

この年の 3 月 20 日にそのイラク攻撃が開始されたことは筆者も鮮明に覚えている。当日 NHK のニュース番組に招かれ、本件についてのコメントを求められたので、「これでイラクに米英軍が入ってみても、核兵器が見つからなかったら、どうなるんですかね」と述べたことがあったからだ。チリが反対した理由につい

ては聞いてないが、同じような懸念を持っていたのかも知れない。それにしても、「自由と民主主義、思想信条の自由を始めとする基本的人権の尊重など同じ価値観を共有する西側諸国」などと表で言いながら、裏で自国の意見と異なる意見を持つ国に対して FTA 調印の引き延ばしとは・・・極めて残念だ、とその時感じた。率直に冷徹な国際政治の現実を教えてくれたこの米国の友人に感謝しつつも、彼の国のダブルスタンダードに彼も悩んでいるのかも知れない、この年日本が非常任理事国でなくてよかった、と筆者は思わざるを得なかった。

それから大分経ってのことだが、チリの政府関係者の一人が筆者のオフィスに挨拶に見えられた。初対面の方であったが、筆者は不躰だとは思いつつも、このチリの政府関係者から米国チリの FTA 案について、そもそもその後どうなったか、それについての感慨等をうかがいたい、という誘惑にかられ、その誘惑に勝てなかった。思い切って切り出してみると、この政府関係者は雄弁に語り始めた。

「貴方が本件をどこまで知っておられるか知らないが、対米 FTA 交渉はシンガポールよりチリの方が交渉は先に終わった。しかし、署名は行われはしたが、チリ米 FTA の方がシンガポール米 FTA より 1 ヶ月も後だった。しかも署名はシンガポールのよう両首脳が出席してホワイトハウスで行なわれたのではなく、チリの外務大臣と米国の国務長官間でフロリダにおいて行なわれた」「しかし、これから話すことが大事なのだ、と言わんばかりの表情になって次のように述べた。「署名がホワイトハウスでなくフロリダで行われようと、その時期が 1 ヶ月遅れようと、両国首脳でなく外務大臣間で行われようと、チリ米国 FTA の内容は全く変更されていない。しかも、対イラク攻撃には反対だという

国連安保理におけるチリのポジションは毫も揺らいでいない。結局我々が勝ったのさ」

チリは小国ではないかもしれない。しかし大国でないことは確かだ。GDP の大きさで見ても台湾より小さいし、2010 年までは香港より小さかった。しかしその国にしてこの気概がある。たかが FTA の話、だが、されど FTA の話でもある。